東方弧毒虫

シュマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方弧毒虫

【Ｎコード】
Ｎ２６８７ＢＡ

【作者名】
シュマ

【あらすじ】
ムカデ嫌いな青年が古代の日本でムカデとして生きていく話
うんよくある話だね。

（前書き）

この話はムカデ成分と東方成分を含みます
ただし萌要素はないのでそういうのが好きな方はバックしてください

オレは惨めな死にざまを自宅の玄関で晒している。

「・・・っ！ぎぎぎ・・・！」

シューズボックスに映るオレの顔は真っ青で、カニみたいに口から泡を吹いて小刻みに震えている。

なぜこんなことになっているか？その理由はオレの靴の中にいるおぞましい物体のせいだ。この物体はムカデといい、毒を持った虫だ。その虫にオレは咬まれ、こんな醜態になっている。

誤解してもらいたくないのだが、ムカデに一咬みで人を殺すような毒はない。ただオレがこの虫に咬まれるのは二回目だということだ。アナフィラキシー・ショック、よく蜂などに刺されたときに聞く言葉だ。

別にアレルギー反応について講釈を述べるつもりはない。

もし二度目の人生があるのならば、オレはこのムカデという生き物を根絶させるだろう。

＋＋＋＋＋

「（ふざけんな！！マジぶっ殺す！！）」

ああ、いきなりですまない。どうやらオレは二度目の生を受けたようだ。

現在の俺の身体は黒に近い緑の甲殻に赤い脚、赤い頭を持つムカデだ。腹立たしいことこの上ない、オレをかんだのもこの配色をしていた奴だったので、オレの怒りはとどまることを知らない。

手当たり次第に暴れ回り、虫や小動物を喰い散らかしている。なんだ？そんなに嫌なら死ねばいいって？

そうだなさっさと死んでしまいたいものだな。だがなこの体の奴は異常なまでにしぶとくてなオレが断食すれば、身体のコントロールが利かなくなって暴食に走り、オレが外敵（トリとか）の餌になりに逝ったら、また身体のコントロールが利かなくなって逆に喰っちまいやがった。

ふざけた体だ、生命の危機を感じたら直ぐに本能のままに動いてしまう。それにだオレはこんな虫野郎に体のコントロールを奪われるのは虫唾が走るってもんだ。

今すぐにでも死にてーがそれにはオレ以外の要因がいる。つまりはこの身体じゃどうしようもないほどの強者、絶対の強者の手が必要だ。

「（それまで好き勝手ヤラして貰おうか。）」

＋＋＋＋＋

ムカデに生れ落ちて幾十年、一向にオレを殺せる奴に出会わない。少しはヤルモノいたのだが、結局オレの餌食となり、ますますオレが強くなるばかり、いつかは会えると思うのだが、それまでにオレが強くなり過ぎないか不安だ。

そういえばこの世には妖怪がいるようだ、どいつもこいつも醜いものばかり、かくいうオレも妖怪の仲間入りを果たしており、体長もとぐろを巻けば小山のような大きなとなった。

全く持って忌々しいことだが、オレの体の増大は止まらず日増しに巨大化している。多分オレがそこら中の妖怪どもを腹に収めているのも一因だろう。

オレが街道に沿って直進していると二つの影が見えた。

「ヒィ、誰か助けて！」

「げひゃひゃひゃひゃ！誰も来やしねーよ！」

ずるりとカゲの後ろに回り込む、どうやら人間の女が妖怪に襲われているようだ。妖怪は人を甚振って殺すのが好きなのか、一思いにはやらないようだ。

おっと、どうやら人間の方はオレに気が付いたようだ。口をパク

パクさせて驚いている。妖怪はオレに気づくことなく人間を追い詰めた。

「ひひゃひゃひゃ！いい顔だ、そうだもっと怯えろ！」

「あ・・あう・・・。」

「あん？どこ見てやがんだ！」

こちらを振り向く妖怪、オレを見たとたん息を呑み、震えた声で喚き散らしてくる。程度が知れるな、オレはいつものように、オレを殺せるか？と聞いた。

すると何を勘違いしたのか知らないが妖怪は持っていた棍棒を振り上げ、オレを叩いてきた。ミシボキャと木がへし折れることが鳴る。どうやら妖怪の力とオレの甲殻の硬さに耐えきれず、折れてしまったようだ。

妖怪は反動で手が痺れたのか、にぶい声を発してこちらを睨んでくる。それがなんになるのか知らないが、次はオレの番だ。

「てめえ！ブッコリュ・・・。」

「・・・・・・っ！」

オレは胴体に食らいつくと妖怪の体を真っ二つにし、咀嚼していく。みるまに欠損している妖怪に正気が戻ったのか、人間が逃げて

いく。

時折こちらを窺いつつ恐怖に満ちた顔で走る人間は、闇にまぎれて消えていく。

オレは人を喰わない、これは別に人を喰うことに罪悪感とか拒絶感があるわけではなく単に妖怪の方が腹持ちがいいからだ。

妖怪は人間より大きいし、人を喰って力を溜めているので、わざわざ人を襲うよりも効率がいいのだ。まあ、たまに大きな力を持った人間もいるのだが、そういうのはだいたい巫女とか血筋によるものだ。

しかし人間は弱く小さいので腹持ちが悪いので、食べることは殆んどない。

「しかし人間もやっと服を着始めたか・・・。」

そうなのだ、実はオレが生まれた時代はまだ人間が石器を使っている時代だったのだ。一応貫頭衣という服を着始めたので、縄文か弥生らへんだろうとオレは考えている。

となるとだ、人間たちの争いが激化していって力を持っていた連中がもしかしたらオレを凌駕する力を発現させるかもしれんな。少なくとも科学が発展して数千年内には殺されるか・・・。

「ゲヘヘ、早く強くなればいいなあ。」

さて未来の話は置いといて西へ向かおう、妖怪がいるのなら神とやらもきっといるだろう。神ならばこの表皮を突き破り、オレを射殺してくれるかもしれん。

＋＋＋＋＋

あれから幾百年の時が流れ、相も変わらずオレはところ構わず食い散らかしていた。この身体は山をぐるぐると巻いてしまえるほど大きくなり、どこにも隠れることが出来なくなり不便に感じる。

それにしても中々人間の文化は進歩しない、変わったことといえば少々金属の道具を使い始めたくらいだろうか。青く光るあの金属はおそらく青銅・・・まあ、オレの甲殻には通じないのあまり興味はわかない。

「くそー！我が十拳剣（とつかのつるぎ）が利かないとは貴様！何者だ！」

「俺を殺せん奴に名乗る名はない。」

しかしこの男もしつこいものだ。その身から発せられる神気からかなりの強さを持った奴だと思うのだが、武器が悪いな。惜しいものだ、その剣が鋼ならばこの身を断ち切ったかもしれん。

「ぬぬう・・・・・・ん？上流から箸が・・・おお！上には人が

おるのだな！こうしてはおれん、このような奴は捨ておいて村へ行こう！」

どたばたとやかましい奴だ。さてオレも奴の後・・・・・いやその先にいるもののところへ行こう。この二日前から感じてはいたがこの非常に強力な妖気、久々の大物だ。これほどのものならオレをやれそうだ。

わさわさと木をなぎ倒しながら進軍していく、一応村にかち合わないように逸れつつ目的地へ行く。

たびたび道草を食いながらも這いずっているとさっきの男が目の前に立っていた。どうしたのかこちらに見向きもせず、ただ前を向いていた。

「貴様か、悪いが相手をしてやる暇はない！」

「こっちのセリフなんだがな。」

すると地鳴りがし、川の水が急に途絶えた。どうやらあっちからお出ましのようだ。蛇が出るか鬼が出るか、できることなら・・・・・。

見えてきたのは山、そういっても過言ではないほどの大きさの竜であった。その威容は素晴らしく、八つの頭に八つの尾、腹は紅く常に血が滲んでいるかのようで、口から酒気の洩れている。あれは

八岐大蛇か・・・となるとこの男はスサノオ？

「サイズはオレとタメだな。」

「我は素戔嗚尊（すさのおのみこと）いざ参る！」

そういって男は雄々しい声を上げ突撃する。

それに気づいたのか大蛇は大きく息を吸い、火炎を吐き出す。その火力といった筆舌しがたく、瞬く間に大蛇の前方の森が焼失してしまった。

流石のオレも熱かったがこれといって効果は無く、大蛇へ進む。

「くっ！卑怯なり！」

おお、男は髪がチリチリになってはいるものの平気なようで、再度突撃していった。しかしその動きに合わせて大蛇は尻尾を横に振るい、巨大な岩石ともども薙ぎ倒す。

「なにくそっ！」

だが男は軽く飛び越え大蛇の懐に入る。そして俺はというと大蛇の尾がオレの体をくの字に折り、足が飛び散ったが衝撃に耐えきり、

山のような体に巻きついていく。

ここからはオレと大蛇の咬み合いだ、オレは大蛇の胴体を刺し、大蛇はオレの体を喰いちぎっていく。その様は怪獣の戦いそのものであり、俺たちが大暴れした結果、山は割れ、谷は崩れ去り、河は埋まってしまうほどだった。

そして男はというと

「どりゃどりゃ！化け物どもめ！これでも喰らえ！」

元気に俺たちの周りを素早く回り、切りつけてくる。男の剣は大蛇の鱗を裂き、オレの傷口を抉ってくる。

もしかしたらこのまま死ねるかもわからん。

「グギャーー！！離せ！離さんか！」

煩いな、このまま死のうか。あれ？こいつ目がないぞ？

「死にとうない・・・死にとうない・・・前が・・・。」

「うおおお！！」

そうかオレの毒で腐り落ちたのか・・・ぐちょぐちょだな。

ああ、しまった先を越されてしまったか。たぶんあの男の剣が止

めとなったか・・・・・・腹が減った。大蛇の肉でも喰うか。

「ふーむ、我の剣が毀れているな。ここになにかあるのか？」

「じゃまだ、喰っちまうぞ。」

「おお、取れた取れた！これは剣だな・・・喰らえ！」

男は大蛇の死骸の中から奇妙な気配の剣を抜き取り、オレに振り下ろした。金属同士がぶつかり合った時のような音をかき鳴らし、オレの甲殻が歪んだ。微かに亀裂が入っており、さきほどの剣よりは強い、だがしかしまだまだ威力が足りない。

これなら大蛇の顎の力の方がよほど強力だ。

「ぐぬぬ、ダメか・・・まあよい、これで頼まれごとは片付いた。やい大百足！いつか貴様を八つ裂きにしてやるから覚えておけ！」

「期待しないで待っている。」

「貴様の所為で酒が無駄になったわ。」

男は鼻を鳴らして村の方へ歩いて行った。

さてこの巨体を喰い切るのにどれくらいかかるだろうか？

＋＋＋＋＋

もう幾年の歳月が流れただろうか？

大蛇の肉を喰らったオレの体には羽が生え、身体はもう身動きするだけで災厄扱いされるほどになった。

流石に俺の相手をしてくれる妖怪も少なくなり、飢餓感に苛まされるようになった。そこでオレは無駄にエネルギーを使わず、効率よく餌にありつくために人間たちを使うことにした。

ことは単純だ。我が物顔で人間の生贄を要求する半神半妖を喰らい、代わりにオレがそこに居座る。そして生贄の代わりに妖怪たちを狩ってきてもらうのだ。

「万足（よろで）様、今年の献上品でございます・・・。」

「そこに置いておけ、では好きなだけ汲んでいけ。」

「ははあ！ありがたき幸せ！おい！」

オレの住む湖（オレが成り代わったのは水辺に棲む龍だった）から水を瓶に入れて持っていく男たち。こいつらが何をしているかというとなんとこの水、万病に効くらしく村に住む連中はこれを売って生計を立てているそうだ。

勿論農業やらもやってはいるのだが、それほどいいものは作れず、更に龍によって災禍にあったりとオレが来るまでかなり厳しい生活だったそうだ。

「へへへっ、それでは失礼いたします。」

「来年も頼むぞ。」

「そりゃあもう！」

ああ、そういえば湖の水がなんで薬になっているかというと、実はオレにも一つの力があって『毒を作り出す能力』なんだが、これはあらゆる毒を造る力で、これを応用して毒の成分から病や傷に利く成分を作り出すことに成功した。

なので人間たちに毎年妖怪数百匹と引き換えにあいつらが汲めるだけの薬水をくれてやっているわけだ。

「そういえば最近人間どもは他の国にも妖怪狩りにいってるみたいだな。」

まあいい、また眠ろう・・・いつかはオレを殺せるのが出てくるだろう。

「万足様！大変でございます！大和の神が攻め入ってきました！」

オレが水の中で微睡んでいると岸の方から男の大声が聴こえてきた。その声はまさに絶叫、焦りが透けて見えた。

オレは遂に来たかと胸を躍らせてその声に応える。

「真か？」

「真にございます！奴らは淡海の向こう岸を行軍中でございます！」

オレは大体淡海（琵琶湖）の東側に棲んでおり、湖と三上山との間の村の連中と交渉している。

ふむわざわざこちらから待たずともこちらから行けるな。オレは逸る気持ち抑えながら男に聞く、オレはこのまま逝くがお前たちはどうすると。

オレはズルズルと湖から這い出して体を露わにする。

「私たちもお供致します！」

「これより死地に入る、死にたい奴は俺の背に乗れ。」

「はい！行くぞテメエら！」

どこから湧いてきたのか百を超える簡素な武装をした男たちが雄たけびを上げながらオレの体に昇ってくる。

ほとほと呆れたものだ、人間というのものはとても愚かで面白い。

オレは羽を忙しなく羽ばたかせ空へ飛びあがる。雲海を突き抜け、眼下の湖を過ぎ去り、そして大和の軍勢を見つける。

このまま強襲しても良いのだが、まずあいつらには言っておかなければならないお約束がある。そこでオレは敵に見える位置に降り立ち、声を掛ける。

「貴様らを率いる神は誰だ。」

眼前に構える兵士たちの表情が恐怖で歪む。無理もない俺だって人間だった頃に、視界に入りきらないほどの巨大なムカデが現れたら卒倒する。

ざわついている兵士たちの頭上を一柱の神が飛び越えてきた。

てっきり荒々しい男神が攻めてきたのかと思えば、現れたのは妙齢の麗人だった。しかしその身に纏う神気はかつてのスサノオを遥かに凌ぎ、オレの意思とは別の本能がざわつき始めた。

信仰はその神の力を決定する大事な要素だ、つまりこの神は信仰

を多く集めた軍神だということになる。

「私だ！貴様がこの地を治める神か。」

「だからどうした。」

「我ら大和にこの地を明け渡して貰おう。無論邪魔立てするなら相応の覚悟をせよ。」

「貴様はオレを殺せるか？」

「ふん、後悔してももう遅いぞ！」

アイツの返答を聞くか聞かないかというところで、遂に体の抑えが利かなくなり、千を超える軍勢に襲いかかる。

勿論オレの背に乗ってきた命知らずどもも一斉に攻め入る。相手の兵士はオレの影から急に表れて怯えがはしった。

人間には人間の相手をさせてオレはアイツの食らいつく。

「ふん！」

しかし相手はその神力を持って大風を起こしオレの攻撃を流す。風に煽られたオレに神は追撃してくる。

極太の御柱がオレの頭を強く叩く、しかしオレにとっては５００

ｍｌ缶ジュースくらいの大きさに感じる柱では多少動きが鈍る程度、再度食らいつきにいく。

「ほう、これならどうだ！」

１，２，３，４，数えるのが億劫になるほどの量の御柱がオレの頭に降り注ぐ、虫であるこの身は痛みを感じはしないが、流石にこの量の御柱だと衝撃で墜ちてしまう。

「む、全く堪えた様子は無いか・・・。」

本能のまま動くこの身体は馬鹿の一つ覚えのように噛み殺さんと迫る。攻撃を喰らえば喰らうほど、その攻撃に慣れていく、今もなおこの身体は成長しているらしい。

新たに相手が出してきた風の刃ともいえるカマイタチも意に介さないオレの装甲には呆れるほかない。

「ちい、化け物だな！」

オレが攻め、神が御柱や風を駆使して避けるといったリズムが出来はじめた頃、先に相手が焦れて動きが変わった。

風に混ざって大粒の雨が体を濡らす。どうやらこの神は天候を操

ることが出来るらしく、雷鳴が聞こえてきた。さっきまでは雲一つない晴天だったので、下の人間たちも大騒ぎだ。

「遊びはこれまでだ！」

一瞬なにが起きたのか、分からなかった。目映い光の後に訪れた灼熱の衝撃がオレの一部を消し炭にする。

二撃目をくらいその攻撃が何かわかる。稲妻が天より降ってきたのだ、オレの身の焼き貫いた一撃はまさに天罰、やはりこいつはオレを殺しうるものだ。

「浅いかっ、くっ！」

雷を体に受けてなおオレの体は依然として、神を喰いちぎろうと猛進する。

もう何度目になるか分からない攻防、すでに人間たちの戦いは俺たちの戦いにより中断しており、固唾を飲んで見守ってきている。

ぼろぼろな俺と無傷な神、一見オレの方が押されているように思えるが、常に攻めているのはオレである。

「はあああ！！」

風が、雨が、雹が、雷が、御柱が降ろうとも常に俺は神に食らいつこうと攻めたてる。次第にアイツの息が上がってきた。

膨大な量の神力の放出、避ける度重なる疲労、終わらない戦い。もう日も暮れ、夜が迫る。夜は俺たち妖怪の時間であり、神の有利な時間である昼はとっくに過ぎ去ってしまった。

「ふぐぅっ・・・。」

そして遂にオレの攻撃があいつに掠める。オレの牙はアイツの左手を引き裂き、その攻撃の勢いは止まらず体がぶつかる。

考えてみてくれトラックの何千倍の体積のあるオレとぶつかることの恐ろしさを、ミンチにならなかったのはそれだけアイツがタフな証拠だ。

墜落していくアイツを見てオレは止めをささんと猛追する。

失望、アイツがオレに当たった瞬間から急激に昂ぶっていた気分が下がる。オレを殺してくれるんじゃなかったのか？そう思いながらも体はアイツを食い散らそうと動く。

「・・・。」

今まさに食らいつこうというとき、アイツと目が合った。まだあいつの目は生きている。湖に墜ちようとしているアイツの目は何か

を狙っていた。

完全にオレが上、アイツが下になった時、爆音が鳴り響いた。アイツは口を呟くように動かし、オレはアイツと共に落ちていった。

アイツの降らせた雷は今までで最大級の物で、その神雷はオレの体を引き裂き、頭部だけ残して抹消させた。

オレとアイツは一緒に水の中に落ちていった。神はしてやったりといった顔をしていたが、それは直ぐに驚愕に変わる。

頭部だけになってもオレの体は奴の身を喰らわんと水の中でも動き出す。しかしその動きも空しく、得体のしれない黒い蛇のようなものがオレに食らいついてくる。

その蛇は奴とオレを陸に上げ、拘束する。

「全く神奈子ったら無茶するわね。」

「ははは・・・予想以上だった。溜めこんでいた力を全部費やしてしまった。」

「だから手を出さない方がいいっていったのに、私はいなかったら間違いなく死んでいたよ。」

「感謝しているよ、諏訪子。」

諏訪子という少女は眉をひそめてこちらを見る。オレは頭だけでも小山のようだから、見上げるのが辛そうだ。

こちらを見てため息をつく諏訪子に疑問がわく。

「なんだ？ヤルならさっさとしろ。」

「あんた手抜いてたでしょ。」

「なんだと！？どういうことだ！貴様！」

意味が分からんな、オレじゃなくて体が勝手にやってたから手を抜くとか抜かないとかの話ではないが、そのことを言っているのか？

「あのね神奈子・・・こいつの能力は『毒を創造する能力』だからその腕の取られたときにはもうアウトだよ。」

「なっ！？」

「そんなことよりもさっさと殺せ。」

殺せというオレともう一度勝負しろと叫ぶ神奈子に頭が痛くなったのか、諏訪子はバカばっかと呟いて俺たちを睨む。

「神奈子はとりあえず黙って。」

「だが！」

「黙れ、で万足だっけあんたは何でそんなに死にたいんだ？」

「オレはムカデが死ぬほど嫌いだ、だから死にたい。」

諏訪子は深いため息を吐いて難儀な奴と呟く、なんとか好きになることはできないか？と聞かれたが無理だといい、今まで行ってきた自殺とオレの死にざまを語ってやる。

「筋金入りか・・・分かったどどめを刺してあげるよ。」

「諏訪子！」

「神奈子、私たちは侵略しに来たんだよ？だったらこいつはさっさと殺してやった方がいい、それがこいつのためだ。」

ようやく・・・ようやくオレのムカデとしての生が終わる。諏訪子の足元からにじみ出る呪いがどんどんオレの體を食い荒らしていく、ごっそりと自分というものが剥がれていく感覚がオレに死を実感させる。

オレはありがとうと念じた。

諏訪子の舌打ちが聴こえた気がする。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2687ba/

東方弧毒虫

2012年1月6日22時18分発行